

## Contents

\*\*\*\*\*

特集：福田新内閣の要点整理	1p
＜今週の”The Economist”誌から＞	
”Glad to be grey” 「灰色は大歓迎」	7p
＜From the Editor＞ 森内閣に似てる？	8p

\*\*\*\*\*

## 特集：福田新内閣の要点整理

朝夕の空気に涼しさに、あれだけ暑かった夏の終わりが急速に感じられるようになった昨今です。7月29日の劇的な参院選が、まるで遠い過去のように思えます。

振り返ると、あれから首相の外遊があり、内閣改造があり、またまた大臣の更迭があり、そして臨時国会が開幕。ところが所信表明演説の2日後に安倍首相が突然の辞意表明。それから自民党総裁選、全国遊説、両院議員総会、そして25日には福田内閣が発足へ。

2007年の秋本番を前に、ようやく一連の騒動が落ち着いた感があります。今週は、発足したばかりの福田新内閣を、「値踏み」してみたいと思います。

## 開けてビックリ5割台（支持率）

9月27日朝、各紙が発表した福田新内閣の支持率は、戦後歴代4位の高さであった。筆者は「低くはないだろう」と思っていたものの、正直、まさか5割を越えるとは思わなかった。ポジティブ・サプライズである。

## ○各紙内閣支持率の推移

	安倍内閣 (7月)	安倍改造内閣 (8月)	福田新内閣 (9月)	増減 (8月 9月)
読売	31.7%	44.2%	58.0%	+13.8%
日経	28.0%	41.0%	59.0%	+18.0%
毎日	22.0%	33.0%	57.0%	+24.0%
朝日	26.0%	33.0%	53.0%	+20.0%
共同	29.0%	40.5%	57.8%	+17.2%

こうなるとついつい考えてみたくなるのは、「自民党総裁選で選ばれたのが、麻生太郎氏だったらどうだったか」である。たいして根拠があるわけではないが、この福田人気を上回ることは、できなかつたのではないだろうか。

思えばここまでが長過ぎた。参院選(7/29)から内閣改造(8/27)、首相の辞意表明(9/12)、自民党総裁選(9/23)、再び党役員人事と組閣(9/25)と異様な事態が続く過程で、国民の中には何より「政治の安定」を求める気持ちが強くなった。ゆえに派手で明るい麻生さんよりも、堅実そうな福田さんが歓迎されている。

逆にいえば、7月29日の時点で安倍首相が素直に退陣していれば、後継内閣がこんな高支持率にはならなかつただろう。ちょうど2001年の政権交代の際に、それまでの森首相の低人気のお陰で、次の小泉内閣が「ロケットスタート」になったのと似ている。

そういう意味では、安倍首相が思い切り事態を悪化させたお陰で、逆説的に福田内閣の好スタートが可能になった。すなわち、”Anybody But Abe”という感情が浮上し、そのお陰で安倍氏と対極的な福田首相が魅力的に見えているのではないか。だとすれば、安倍時代の記憶が薄れるにつれて、福田人気もじょじょに色褪せていくかもしれない。

### 人気者より癒し系？（総裁選）

今週行われた総裁選挙は、自民党にとっては「国民的な人気があり、“選挙の顔”になれる麻生さん」と、「党内の安定を図ることができる福田さん」のどちらを取るかという選択だった。解散・総選挙が近そうなことを考えると、麻生氏も捨てがたいところだったが、長い「劇場型政治」に疲れた自民党が選んだのは、何より党内に落ち着きを取り戻してくれそうな福田氏であった。

そしていつものことながら、自民党総裁選挙では含蓄のある数字が出る。

福田康夫 330 票、麻生太郎 197 票。 「9 派閥中、8 派閥による麻生包囲網」が事前に喧伝され、麻生太郎氏は「2006 年総裁選で得た 136 票が当面の目標」「それ以下だと、政治生命の危機」といわれていたものの、200 票にあとわずかの水準に迫った。

開票時の麻生選対は、明るさに包まれていたようだ。

### ○河野太郎衆議院議員「ごまめの歯ざしり」9月24日分

麻生選対、打ち上げ。

埼玉県が10055票と10498票、400票あまりの差で負けていた。これが勝っていれば、3票総取りで、200票だったと、埼玉選出の中野、今井、山口の3人がいじられていた。

予想をかなり上回ったようで、みんな元気。

相沢英之先生は乾杯の音頭で、おめでとうと言っちゃいけないねとおどける。

誰かが、百歳で亡くなった人のお通夜みたいだ、残念だけど充分だね。すぐに別な誰かが、うーん、97歳だね。埼玉の3人が苦笑い。

しかし本当に麻生氏が 200 票を超えていたなら、両者の差はかなり接近した印象になったはずである。互いに無視できない勢力となり、その後の自民党は挙党体制を取りにくくなっていただろう。逆に 200 票に 3 票足らなかったお陰で、麻生氏は善戦を印象づけつつ、堂々と閣外で休憩できるようになった。つまり福田氏は面目を保つことができ、麻生氏は「ポスト福田」の有力候補として生き残った。自民党全体としては、「党内融和」を維持しつつ、福田内閣が座礁した際の「受け皿」も用意できた。

徐々に、「自民党の知恵」を感じさせる結果であったといえるだろう。

### 今どき「派閥人事」の理由（組閣）

その後で行われた「党役員人事」と「組閣」は、いかにも対照的だった。

党役員人事では、伊吹幹事長というサプライズはあったものの、全体に「古い自民党の復活」と評判は芳しくなかった。なにしろ**総裁と党四役の平均年齢は 67.4 歳**である。

翌日の組閣は、前政権をほとんど『居抜き』で継承し、新味がほとんどない粗放な決定に見えた。しかしよく見ると、 安保関係では「高村外相 = 石破防衛相」というベテランのツートップを用意し、 麻生支持だった鳩山法相、甘利経済産業相、安倍首相に近い渡辺金融相も留任、など巧妙さと大胆さが入り混じった陣容でもある。

特筆すべきは、自民党の 9 派閥のうち、7 つの派閥の領袖を党四役と重要閣僚で取り込んでいることだ。そこから漏れた山崎派には、唯一の新任閣僚として渡海文科大臣を登用し、「気持ち」を表している。絵に描いたような派閥均衡人事なのである。

### ○自民党派閥と勢力分布

（派閥）	議員数（衆 + 参）	
町村派 清和政策研究会	80（60 + 20）	* 官房長官
津島派 平成研究会	67（47 + 20）	（ 額賀氏を財務相に）
古賀派 宏池会	46（38 + 8）	* 選対委員長
山崎派 近未来政治研究会	39（36 + 3）	
伊吹派 志帥会	25（19 + 6）	* 幹事長
麻生派 為公会	16（13 + 3）	（フリー）
二階派 新しい波	16（14 + 2）	* 総務会長
高村派 番町政策研究所	15（14 + 1）	* 外相
谷垣派 宏池会	15（12 + 3）	* 政調会長
無派閥	71（54 + 17）	
合計	389（305 + 84）	

もっとも、すでに自民党議員の2割弱が無派閥となっている現状では、かかる派閥人事が本当に有効であるとは思われない。そもそも派閥が健在であったなら、麻生氏が197票も取れることもなかったはずである。

強いていえば、福田氏は「迷ったときは基本に帰る」という意味で派閥を利用しているのであろう。現に組閣も派閥からの推薦は受けず、一方的な指名という小泉スタイルを踏襲している。自分で「目利き」をするよりも、派閥の領袖を使った方が間違いも少ないし、党内の摩擦も少ないだろう、と割り切っているのではないだろうか。

福田氏は小泉政権下で長く官房長官を務め、他の閣僚ポストを経験していない。いわば、21世紀型の「官邸主導政治」の申し子である。経済財政諮問会議を舞台に、小泉＝竹中コンビが大胆な経済運営をした際はすべて同席し、小泉改革を支える立役者の一人だった。また、「9・11」、日朝首脳会談、イラク戦争、陸上自衛隊派遣、といった困難な時期に、「官邸外交」のコントロールセンターを務めた人物でもある。

官僚との関係に意を砕き、静かにボトムアップを待つという、古いタイプの自民党首相にはならないのではないだろうか。

### 「衆参ねじれ」は変わらない(国会)

とはいうものの、福田新内閣の前途が、安倍内閣よりも明るくなったとはいえない。参議院において、民主党が第一党であるという現実是不変から、「衆参ねじれ国会」という状況がある限りは、政府・与党が思い通りに国会運営を行うことは不可能である。

何よりこの状態は、一朝一夕には解消できない。一番早いのは、「次の総選挙で民主党が過半数を取る」場合であるが、民主党としても全国300の小選挙区すべてに候補者を用意できているわけではなく、自民党は仮に現有勢力から60議席減らしてもまだ過半数を維持できる。そして参議院の勢力が変わる機会は、早くても3年後である。「ほとんど同じ力を持つ両院で、与野党が入れ替わっている」という現状はなかなか変えられない。

そこでしばしば言及されるのが「政界再編」と「大連立」である。が、筆者はいずれも実現する可能性は低いと考えている。

まず「政界再編」は、現在の選挙区事情を考えれば、政治家が政党を変えるハードルはけっして低くない。「二大政党が理念と政策で対立軸を作る」ことは理想的ではあるが、そういう発想は得てして、「政治家を好きな人チームと嫌いな人チームに分けるゲーム」になってしまう。重要なことは、二大政党が競い合うことであるから、双方に似たタイプの政治家がいることは、むしろ望ましいことなのである。

次に「大連立」については、これが成立しているドイツやスウェーデンは、比例代表型の選挙を行っていることを忘れてはならない。日本のような小選挙区型の議会(例えば英国)では、二大政党は対立的な構図となるので、よっぽどの事がない限り「大連立」には至らない。あくまでも「最後の手段」と考えるべきであろう。

「衆参ねじれ現象」が変わらないのであれば、何とか今のままで民主党と折り合いをつけながら、政策実現の糸口を見出していく以外はない。還言すれば、二大政党間で新たなルール作りを目指していくことになる。

福田首相は、「野党との話し合いを重視する」とのメッセージを送っている。これは仕方がないことともいえるが、見方を変えれば「民主党側にボールを渡している」ともいえる。将棋で形勢が不利なときに、プロはわざと「一手パス」のような手を指し、相手に手を渡すことがある。手を渡された側は、攻め手がたくさんあるだけに迷いが生じ、間違えて悪手を指してしまうことがあるからだ。

現在の国会においては、参院民主党が鍵を握っている。参院民主党は、問責決議、衆院可決の法案否決、審議未了廃案、参院先議、予算関連法案、国政調査権、国会同意人事などの有力な「攻め手」を有している。どれを最初に使うかは迷うところながら、イメージ的には参院先議で、まずは政策のイニシアティブを取り、政権担当能力があることを見せたいところであろう。

そこで例えば臨時国会において、「年金流用禁止法案」を参議院で成立させるという手がある。ところが、野党側は法案に反対することに慣れていても、法案賛成のための演説や質疑を行った経験が乏しい。逆に与党側は、内閣法制局を含む官庁すべてを味方につけて、野党提出法案のあら捜しができる。この作戦はあまりお勧めではなさそうだ。

逆に有力なのは、国政調査権や国会同意人事を使い、政府・与党にプレッシャーをかける手段である。つまり、民主党側も「相手に手を渡す」作戦が有効となる。

衆参ねじれ国会は、つくづく先が読みにくい。確実にいえるのは、新しいルールが醸成されるまでには、相当に時間がかかりそうだということである。

## インド洋より「年金・格差・地方」(政策課題)

そんな中において、臨時国会の優先課題は何だろうか。

年内の政治日程を考えると、残り3ヶ月はかなりタイトである。

### ○今後の主要な政治日程

10月1日	所信表明演説～代表質問
中旬	インド洋給油活動継続法案の審議入り
11月1日	テロ特措法の期限切れ
10日	臨時国会の会期末
20-21日	東アジアサミット(シンガポール)
	総理訪米?総理訪中?
12月下旬	2008年度予算案を閣議決定

「テロ特措法」が11月1日に期限切れとなる中で、それに代わる新法をいかに成立させるかが臨時国会の焦点、と言われている。そのために、政府・与党は「インド洋給油活動継続法案」を提出する。仮に参院で否決されれば、国会会期を延長して「衆院3分の2の賛成による再可決」を目指すというテクニックもある。

確かに対テロ活動の延長は、わが国の国際信用に関わる重要問題ではあるが、それで国民生活が変わるとか、現状に大きなプラスが生じるという性質のものではない。また、どの道、インド洋上での海上自衛隊の活動が中断を余儀なくされるのであれば、来年の通常国会に先送りしても大きな違いはないという判断もできるだろう。

それよりはむしろ、国内問題を中心に上げるべきではないだろうか。**特に有権者の関心の高いのは、「年金問題、格差是正、地方経済」**などである。これらの課題に取り組む際は、具体策が出しにくい上に「改革路線との矛盾」という問題に悩まなければならない。が、これを無視していると、確実に民意の復讐があるはずだ。

あれだけ劇的な参院選の結果があったにもかかわらず、臨時国会での最優先課題がインド洋での国際貢献ということになると、「国民の声が政治に届いていない」ということになる。安倍前首相との違いを際立たせるためにも、福田内閣にとってはここが重要なポイントになってくるだろう。

## 次の政治決戦は？（解散・総選挙）

最後に解散・総選挙の時期を考えてみよう。

日程のタイトさを考えると、**年内解散の余裕はなさそう**だ。福田内閣としては、「支持率が高いうちに選挙を」という誘惑があるかもしれないが、何しろ今年は統一地方選挙（4月）参院選（7月）自民党総裁選（9月）までやってしまっている。党組織としては、「この上、衆院選までは勘弁して欲しい」がホンネであろう。新たに選挙対策委員長を加えた「党四役」としても、ある程度の準備期間が必要とするはずだ。

対する民主党側も、「年内解散」を求めているものの、こちら時間もほしいところである。福田内閣の人気も、半年後には落ちているだろうという期待もある。

おそらく2008年度予算を仕上げた後、**来年5月の大型連休で首相が外遊を終えた後が本命のタイミング**といえるだろう。その上で6月に総選挙を実施し、7月のG8洞爺湖サミットを迎えるという筋書きである。古臭い発想だが、「G8を主催するのは、民意を得た首相で」ということだ。

2000年の沖縄サミットの際も、森政権下で「話し合い解散」が行われた前例がある。2008年は米国、ロシア、台湾など、選挙の当たり年だが、日本でも政治決戦が行われることになるのではないだろうか。

## <今週の”The Economist”誌から>

”Glad to be grey”

「灰色は大歓迎」

Asia

September 22<sup>nd</sup> 2007

\*9月23日に行われた自民党総裁選に対する”The Economist”誌の報道です。気のせい、言葉の端々に「あ～あ」という嘆きが込められているように思えます。

<要旨>

9月12日の首相辞意表明から、安倍晋三はすかさず病室に逃げ込み、肉体的にも精神的にも破れた状態にある。与謝野官房長官への権限委譲は行われていない。与謝野氏は書類の束を持ち込んでいるとの噂もある。世界第2位の経済大国は指導者不在状態だ。

後継者を選ぶ自民党総裁選は9月23日に行われ、その2日後には衆院で首相に選ばれる。だが参院では野党民主党が多数であり、その大敗こそが安倍退陣の原因である。

長らくポスト安倍に擬せられてきたのは、吉田茂元首相の孫、麻生太郎である。元五輪選手でマンガを愛する麻生は、都会的で国民の受けがいい。だが自民党内には、参院選後の数週間を無駄にし、所信表明演説の2日後という安倍辞任のタイミングへの怒りがある。

麻生氏は安倍氏に近く、辞意も知っていた。これは大失敗ではないのか。怒った議員たちは、別の元首相の息子、福田康夫(71歳)を担ぎ出した。主要派閥の支持を得て、もはや当確に等しい。麻生氏の生き残りは、地方の党員票を獲得できるかに懸かっている。

2候補の政策面の違いは小さい。小泉純一郎が破壊した、公共事業による地方支配を復活させるつもりはなく、改革と財政引締め犠牲になった人々を助けたいと思っている。

わずかな違いがあるのは、福田氏が父と同様に、アジアとの和解に心を砕き、親中派であったことだ。麻生氏は中韓の奴隷労働を使ったセメント会社の子孫であり、歴史認識も違う。外相としては「自由と繁栄の弧」を提唱し、明確に中国を排除した。ただし中国台頭を歓迎した初の外相でもある。はっきり違うのは、北朝鮮核問題への対処だ。麻生氏は核廃棄と拉致解決まで圧力が必要だと言い、福田氏は国交正常化に力点を置いている。

それ以上に、福田氏は自民党の流儀に合う。灰色さの復権だ。派手さは時代遅れとなり、和解と妥協の出番である。無類のショーマンである小泉氏も福田氏を支持している。

恐らく自民党は賢明なのだ。野党党首の小沢一郎も元自民党幹部であり、テロ特措法の延長を止めることを争点にしようとして、国連の支持がない活動は参院で葬るとしている。

すでに福田氏は民主党を慌てさせている。日本が世界の問題地域で活動できる新法を議論したいといい、同時に安保理が日本に感謝する決議を出すよう促している。小沢氏は困る。インド洋からの撤退を指示することで、日本の国際的な地位を悪化させたくない、という民主党議員は多い。前代表である前原誠司は、党内のコンセンサスを重視すべきだと言う。福田氏は来春、予算が成立するまで首相に留まり、来夏のG8サミット主催を目指すだろうが、民主党からの妥協をもぎ取りたいと考えているだろう。

## < From the Editor > 森内閣に似てる？

今回の政権交代劇を振り返って、2000年4月の森内閣誕生と似ていることに気がつきました。「小渕 森」と「安倍 福田」には、以下のような共通点があるのです。

- (1) 前任者が突然、機能不全になった。(小渕さんは脳梗塞で倒れ、安倍さんは精神的に参ってしまった)
- (2) 前任者に引導を渡したのは小沢一郎氏だった。(小渕さんには自由党の連立離脱を突きつけ、安倍さんにはテロ特延長を拒否した)
- (3) 次の人は、あまりリスクを冒すことなく首相の座を射止めた。(森首相は密室の協議で決まり、福田首相の総裁選は楽勝だった)
- (4) 前政権の側近は悪者になってしまった。(青木官房長官は「小渕首相の病状について食言した」、麻生幹事長は「安倍首相の辞意を知って黙っていた」と批判された)
- (5) 組閣の余裕がなかったので「居抜き内閣」になった。(いずれも国会会期中のハプニングであり、ほとんどの閣僚が留任した)
- (6) 解散・総選挙の時期が近い。(当時は2000年10月19日が任期満了。現在は2009年9月までだが、そう遠くはないだろう)
- (7) 間もなく国内でのG8サミット開催を控えている。(2000年7月21～23日が沖縄サミット、2008年7月7日～9日が洞爺湖サミット)

こうして振り返ってみると、よく似ている上に、7年前と一部の役者が重なっていたりする。日本政治は進歩がないのでしょうか。でもまあ、現職の首相が突然倒れても、スムーズにバトンタッチができるのですから、これはこれですごいことなのかもしれません。

\* 来週は本誌をお休みして、次号は10月12日(金)にお届けします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)